奈 良 女 子 大 学 附 属 学 校

第23号・2016年5月31日

附属学校園への期待

奈良女子大学長　今岡　春樹

国立大学法人では、第３期中期目標期間が平成28年度から始まりました。世の中の変化は一層めまぐるしくなっています。一方で国立大学そして附属学校園に寄せる期待は益々大きくなっています。

第２期中期目標期間において幾つかの重要な法律ができました。平成25年9月28日には「いじめ防止対策推進法」が施行され、重大事態の定義と対応策が明確になりました。平成27年4月1日には「地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部を改正する法律」が施行され、首長と教育長が一同に会する総合教育会議ができました。平成28年4月1日には「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」が施行され、合理的配慮という対応が必要になりました。

第３期においてすでに予告されている重要な改定に、次期学習指導要領があります。これはコペルニクス的転回で、「何を教えるか」から「何をできるようにするか」への転回です。認知能力から非認知能力へ重心を異動させるのです。本来学習指導要領とは何を教えるかという視点で作られる規定です。何ができるかを規定することは一般には困難だと思います。そこで出てくる概念が「カリキュラム・マネージメント」です。生きていくための資質・能力を育むのですが、その獲得具合は一律ではなく柔軟な対応が必要なのです。教えるのではなく育成するのでPDCAを廻すことになります。幼稚園では平成30年度から、小学校では平成32年度、中学校では平成33年度、高校では平成34年度から実施される計画です。有為な人材の定義が変わったのです。

このコペルニクス的転回は幅広い影響力を持ちます。教員養成では教科に関する科目と教職に関する科目の統合による科目区分の大括り化が計画されています。大学院教育による専修免許取得はマネージメント能力育成を基本とした教職大学院が主流になりました。現職研修については、教員研修センターを改め教員資質向上支援機構を設置する動きがあります。高校教育、大学教育、大学入試を総合的に改革する高大接続もこの流れの中にあります。

平成18年に改正された教育基本法では、「大学は、学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。」と謳われ、社会の発展と強くリンクしました。第３期の附属学校園の役割では、教育課題への対応、大学・学部との連携、附属学校の役割・機能の見直しに加えて、新たに「地域との連携」が示されました。具体的には、地域の学校が抱える課題の解決や教員の派遣と研修について教育委員会との連携を強めるというものです。もっと広い意味では「チーム学校」実現のための第一歩という見方もできます。この改正教育基本法では、「教員については、（中略）、養成と研修の充実が図られなければならない。」とあり、その具体化の第一歩でもあります。

これからの日本を支える人材の育成が教育機関の使命ですが、教える教員の変革、教える学校システムの変革が必要です。国立大学法人の附属学校園ではすでに「何ができるか」という視点での教育を先導してきたという自負があります。その上で、日本全体がその方向にシフトしていくことをアシストしていく役割が期待されています。大学としてもできる限りの連携と応援を行います。附属学校園においては、全附連と歩調を合わせながらより一層の努力をしていただくことを期待します。

就任のご挨拶

附属小学校長　成瀬　九美

春夏秋冬の季節をもうひとめぐり、附属小学校で過ごすことになりました。始業式で5、6年生に向けて、「もうすっかり小学校のリズムに馴染んでいると思うので、その中で自分が成長できるように挑戦してみてください」と話したのですが、あとから考えてみるとそれは私自身にも向けたメッセージでした。翌週の第5回入園・入学式で、お祝いの歌として「Believe」を聴きました。この曲の、特に「アイ　ビリーブ　イン　フューチャー　信じてる」のあたりを子どもたちが軽やかな声で歌うと、何度聴いても心にぐっと響きます。私の年齢になると口にすることも減ってしまった未来という時間軸に気づかされるためでしょうか。さらに言えば、信じて進もうとする子どもたちの力を伸ばす環境を整える責任というものにも思いが及びます。

附属小学校には年間を通じて多くの研究者や教員志望の学生をお迎えします。昨年度はのべ500名の方が日常の学習の参観に来られました。また、毎年1000人以上の参会者を集める2月の学習研究発表会では、教室に入れなかった方々が廊下から子どもたちの発言に耳を傾けメモを取っておられる姿を見かけます。近年、アクティブ・ラーニングというキーワードが取り上げられるようになってから、「奈良の学習法」への関心がより一層高まっているようです。

しかし、どれだけたくさんの方やどのような方が参観に来られようと、また、どの学年であっても、普段通りに子どもを中心にすえた学習が進んでゆく光景に私は感嘆し、子どもたちにとって、それが身に付いた学習の進め方であることを再認識しています。小学校の先生方が、子どもたちの前に常にオープンな態度で臨んでおられる姿からは、同じ教員として大切なことを学ばせてもらっています。

「引き続き」と「心機一転」の気持ちを混ぜ合わせてこの1年を務めて参ります。お力添えのほど、どうぞよろしくお願いいたします。

就任のご挨拶

附属小学校副校長　堀本　三和子

とうとう附属小学校で一番の年長者となり、この度副校長のお役目をいただくことになりました。どうぞよろしくお願いいたします。

私は立派な実績があって附属に赴任したわけではなく、たまたま公立小学校から迷い込んで来て、あっという間に23年の年月が過ぎてしまいました。長い間附属小学校に置いていただいたことに、感謝の気持ちでいっぱいです。これまでお世話になった分をお返しするのが副校長の務めだと考え、自分にできることを誠実に進めていきたいと思っています。

附属小学校では、子どもたちが主体的に活動し、学校生活をよりよくしようと頑張っています。

４月に入学した１年生は、給食を食べて５時間目まで学習する生活に慣れてきました。朝の会で元気に話したり、見つけたものを持って来て学級で発表したりして、自己の表現力を高めています。

２年生と４年生は、クラス替えがありました。新しい環境で、新しい人間関係を築きながら「なかよし」を広げようとしています。３年生は、「なかよしラボ」（３～６年生による異学年協同学習）という高学年の仲間に入り、集団の中で上学年の様子を見ながら、自分の学びを創る活動を始めています。

５・６年生は、この学校のいろいろな組織や行事を動かす大きな役割を担います。なかよし委員会・かんきょう委員会・けんこう委員会や、放送・運動場・飼育・栽培などの係活動、各行事の実行委員も、全て子どもたちが中心になって進めます。自分のためだけではなく、学校のみんなのために働ける附小の子どもたちが、「なかよし」の活動を推進します。

私たち教師も、子どもたちと共に『すっきりとした学校』を目標として、努力を続けたいと思います。

幼稚園・小学校入学式

中等教育学校入学式

第5回入園・入学式を行いました。

附属幼稚園と小学校は、平成28年4月11日に附属小学校体育館で、第5回入園・入学式を行いました。

これまでとは少し違った雰囲気の式でした。回を重ねてきたので、和やかな雰囲気だったこともあったでしょうか。3月まで5歳児だった1年生も「なかよしひろば」でよく来た体育館ということと、呼名を終えて緊張感がとれ周りを見渡す心の余裕があったこととで、興味をもったことについて友達と話をし、式には少々にぎやかに感じられました。小学校に来ることが初めてだった3歳児やいろいろな幼稚園や保育園から来た1年生、保護者の方は驚かれたかもしれません。

しかし、そのにぎやかさを一変させたのは、5年生と6年生のお兄さん・お姉さんたちでした。代表の児童4人の「お迎えのことば」が始まったとたん、シーンと静まり、真剣に耳を傾けて聞き入りました。毎年のことながら、子どものことばが子どもの心に響くのだなと、子どもの力に改めて感心しました。それから、5年生・6年生の歌のプレゼントがありました。その歌声にも5年生・6年生の温かい気持ちがこもっていました。子どもにとっても、保護者にとっても、6年後・9年後の成長の姿を見ることができ、この奈良女子大学附属幼稚園・小学校で過ごすことに期待をもたれたのではないでしょうか。幼稚園と小学校では幼小一貫教育を行っています。「学びの文化の伝承」となるように、「なかよしタイム」（3～5歳児）「なかよしひろば」（5歳児・1年生・2年生）「なかよしラボ」（3～6年生）という異年齢による学び合いを実践しています。このよき伝統がしっかりと子どもたちの間に根付いていくようにと願った入園・入学式でした。

4月9日、本校は新入生121名を迎えました。

桜は数日前の大雨で多くが散ってしまっていて残念でしたが、幸い晴天に恵まれました。

冒頭の「氏名呼上」では、名前を読み上げられた新入生たちが元気のよい返事とともに起立していきます。在校生代表生徒の歓迎の言葉ののち、新入生代表の挨拶が続きます。

「ぼくは、この学校でいろいろなことに挑戦したいと思います。例えば、クラブ活動や学園祭です。学園祭へは何度も来ていますが、その時にとても楽しみ、そして笑顔で帰れました。今年の学園祭からは、僕が作る側になって、人を笑顔にさせたいと思います」という目標を語りつつも、「しかし、今までとは違った風景には不安も感じます。授業の内容やスピードの変化に対して、人間関係に対しての心配があります」と不安感ものぞかせます。しかし「これからの学校生活でしっかり学び、行事などを楽しみ、自分が少しでも成長できるように頑張りたいと思います。」と前向きの姿勢を示し、そして最後は「私は、これから、全て自分で考え、責任を持ち行動します。この学年の仲間と協力し合いながら、人と人とがつながることの意味を学んでいきたいです。」という、大変頼もしく、また力強い決意の表明で締めくくられました。

これからの6年間で、彼らはさまざまな体験をし、そのなかで大きく成長しながら、最終的には自らの進路を自力で切り拓いていってくれることを期待せずにはいられません。

着任のご挨拶

附属幼稚園　上田　晶子

今年度より奈良女子大学附属幼稚園で短時間教諭として勤務させて頂いています。本園の　“望ましい子どもの姿”また“教育目標”に共感し、子どもたちの、のびやかな表情や個々 豊かな活動内容に、心が弾み、思わず笑顔になっている毎日です。

年少児もも組の副担任として毎日活動していますが、入園してきてまだ間もない年少児たちと共に、日々、園生活に慣れ年長児や年中児の手ほどきを受けながら、園での“楽しいこと発見!!”“すごいこと発見!!”を毎日楽しんでいます。

奈良女子大学附属幼稚園の子どもたちの印象は、表情も活動も、生き生きと明るく、のびやかであるということです。毎朝登園してくる子どもたちはまさにその通りで、体調により不安げで、あったりさえない表情をしていることはあっても、本当に生き生きと元気に登園してきてくれます。家庭から離れ、初めての集団生活のなかで、何とか自分の力で身支度などをやり遂げようとする姿、また入国後数日でやり遂げてしまう力に本当に脱帽です。　自然の中に身を置き様々な体験や発見をする、異年齢の子たちの温かい心や言葉や態度に触れる、感じたことを思いのまま表現する機会がいつもそばにある。このような環境の中におかれることで“子ども”はこんな風に毎日が成長なんだと改めて感じる毎日です。こ れまでの保育経験も活かしつつ、本園での保育活動をしっかりサポートできるよう頑張ります。

着任のご挨拶

附属小学校　杉澤　学

２年生と学習を楽しみながら主幹教諭として勤務することになりました。校長及び副校長を助け、校務の一部を整理、遂行したり、本学及び附属学校部、各教育機関と連携したりするとともに、自らの教育実践を通して教諭その他の職員に対して積極的に指導及び助言を行っていきたいと思います。

遡ること1947年、当校に着任した重松鷹泰主事を中心として、「人間として強い人間の育成」を教育の目標に掲げ、「現代的な民主的公民」を育成するために「人間らしい生活を実現するに必要な能力」をどう高めていくのかといった課題意識のもとに、「しごと」「けいこ」「なかよし」という三つの名称の「生活部面」を構想したカリキュラムを提案しました。これがのちに「奈良プラン」と呼ばれる教育構造であり、1948年9月より実施され現在に至っています。

昨年から文部科学省研究開発学校として「生活学習力」を育む幼小一貫のカリキュラム開発に取り組んでいます。これは「奈良プラン」創設以来の「なかよし」の大改革を内包しています。教職員が自主性、創造性、協調性、滑稽性を発揮して研究推進できるように一意専心尽力する所存です。どうぞよろしくお願いいたします。

着任のご挨拶

附属中等教育学校　守本　寛治

はじめまして、本年度より附属中等教育学校に着任しました守本寛治です。教科は理科を担当し、専門は物理です。小学生のときから理科と算数が大好きで、親に「なんでそうなるの？」という質問をよくしていました。高校時代に理科のなかでも特に物理が好きになり、大学は理学部物理学科へ進学しました。今でも小学生のころからの好奇心は変わらず、最新の物理学のニュースを見るとわくわくします。

前年度は、大阪府の公立高校で非常勤講師をしながら、大学院で量子力学を使った研究をしておりました。縁あって、二足のわらじを履くのをやめ、伝統ある本校に来させていただきました。知人から本校の校風は聞いておりましたが、生徒が進んで学び、行事を運営する姿勢に、毎日驚かされています。

本校での教師生活が始まり、はや1ヵ月が過ぎました。教育に関しても、物理に関しても、まだまだ「分からないことだらけ」です。この「分からないことだらけ」の原因は、日々何かに興味を持ち、考え、常に分からないことを作っているからだと思います。何かについて理解しても、また次の疑問がでてくるのです。これからも現状に満足せず、「分かった」という状態が危険であると自覚し、学び続けようと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。